

流行ニュース：

<豚インフルエンザ>

WHO は現在ヒトにおける豚インフルエンザ A(H1N1)に対する国際的な対応をとりまとめ、パンデミックの兆候を監視している。最新の情報は、下記のホームページから入手できる。

参照ホームページ：<http://www.who.int/csr/disease/swine-flu/en/index.html>.

流行ニュースの続報：

<豚インフルエンザについてのよくある質問>

* 豚インフルエンザとは？：豚インフルエンザは、豚インフルエンザA型ウイルスによって発症する、豚の急性呼吸器疾患である。感染性は高いが、死亡率は低く、エアロゾルや直接または間接的な接触により広まる。豚での集団発生は年間を通して見られ、多くの国では豚に定期的にワクチンを接種している。豚インフルエンザウイルスの中では、H1N1が最も一般的である。豚は、豚インフルエンザだけでなく鳥インフルエンザや季節性のヒトインフルエンザにも感染する。豚が一度に複数の種のインフルエンザウイルスに感染すると、遺伝子の交雑が起こり、“遺伝子交雑”ウイルスが生まれる。通常豚インフルエンザウイルスは豚にのみ感染するが、時に種の壁を越えてヒトに感染する。

* ヒトの健康への影響は？：ヒトでの豚インフルエンザの集団発生及び散発的な感染がしばしば報告されている。臨床症状は季節性インフルエンザと同様であるが、不顕性感染から死に至る重症肺炎まで広範囲に及ぶ。症状が季節性インフルエンザなどと似ているため、ヒトの豚インフルエンザウイルス感染は、診察中に偶然発覚することが多く、軽症及び不顕性感染の場合は発覚しない可能性がある。そのため、ヒトの間でどの程度広まっているのか、実態は明らかでない。

* ヒトへの感染が起きている場所は？：2007年に国際保健規則(2005)¹が施行されて以来、WHOはアメリカ合衆国とスペインから正式な報告を受けている。

¹国際保健規則(2005)：<http://who.int/ihr/about/en>

* ヒトはどのようにして感染するのか？：通常は豚から感染するが、ヒトからヒトへの感染も報告されている。

* 豚肉や豚製品を食べても安全か？：豚インフルエンザウイルスは、70°Cの加熱によって死滅するので、適切に調理された豚肉や豚製品を食べても感染することはなく、安全である。

* 豚インフルエンザの豚での集団発生が起きている国は？：国際獣疫事務局²への届出義務がないため、世界的な分布状況は明らかでないが、豚での集団発生は、アメリカ合衆国を始め北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ(イギリス、スウェーデン、イタリアを含む)、アフリカ(ケニア)、中国及び日本を含む東アジアの一部で見られている。²国際獣疫事務局：http://www.oie.int/eng/en_index.htm

* パンデミックの可能性は？：大部分のヒトは、豚インフルエンザウイルスに対する免疫を持たないため、ウイルスがヒトからヒトへ効率的に伝播するようになれば、パンデミックが起こり得る。

* ヒト用の豚インフルエンザワクチンは存在するのか？：現在のところヒト用の豚インフルエンザワクチンは存在しない。有効なワクチンを開発するため、WHOはワクチンの候補となるウイルスを調査中である。

* 入手可能な治療薬は？：adamantanes(アマンタジン、リマンタジン)及びノイラミニダーゼ阻害薬(オセルタミビル、ザナミビル)という2つの抗ウイルス薬は、予防や治療に効果が認められている。これまで大部分の患者は、医学的治療や抗ウイルス薬を使用することなく回復している。アメリカ合衆国で最近ヒトに感染した豚インフルエンザウイルスはオセルタミビル、ザナミビル感受性で、アマンタジン、リマンタジン耐性です。医師は、臨床症状や抗ウイルス薬の効果と副作用³を考慮して、投与を決定すべきである。

³抗ウイルス薬の効果と副作用：

http://www.who.int/csr/disease/avian_influenza/guidelines/pharmamanagement/en/index.htm

今週の話題：

<こころの健康¹>

海外旅行では、ストレスを感じる人が多い。強いストレスを受けることで、身体的、社会的、心理学的な問題が引き起こされ、精神疾患が悪化する人や、精神疾患を発症する人もいる。

国や地域によって、精神保健に関する社会基盤には違いがある。そのため、医師は旅先においても適切な治療ができるのか、あるいは本国に帰還させる必要があるのかを判断すべきである。

¹「海外旅行と健康2009 第十章こころの健康」を再編したものである

精神疾患と旅行：こころの健康の不調は、旅行者の間で最も多い体調不良の原因で、“精神科救急”は、飛行機による救急搬送の最も多い原因の一つとなっている。

精神疾患の予防：旅先についての情報を事前に収集しておくことで、心理的な不安や精神疾患の悪化を軽減することができる。

<精神疾患>

* 不安障害：MatsumotoとGoebertの研究によると、アメリカ合衆国で起きた飛行機内での医学的緊急事態の約3.5%が精神疾患で、その90%が不安障害であった。

飛行機恐怖症：飛行機恐怖症は、飛行機に対して強い恐怖を抱く症状で、暴露療法が有効である。

パニック発作：パニック発作は、自律神経系の活動亢進を伴う突然の強い不安が特徴である。パニック障害や薬物乱用だけでなく、飛行機恐怖症でも起こる。原因はストレスで、旅行もきっかけの一つになる。カフェインや非合法ドラッグ、市販の風邪薬は発作を悪化させるので、症状の重い人には禁忌である。

* 気分障害、自殺企図：

うつ病：うつ病は憂鬱な気分の持続や、何事にも興味を持たないことが特徴で、海外旅行や海外移住によるストレスは、うつ病の原因となり得る。深刻な問題として、自殺や精神異常の発症が挙げられ、専門の医師の治療を必要とする。

自殺の危険性：うつ病は、自殺念慮の頻度や強さによって分類される。自殺の危険性が高い場合は、緊急入院や近隣の施設に搬送することが第一で、それが不可能な場合は、自殺の予防策を立てておく。また、精神異常や深刻な薬物乱用を示す人は、専門家の診察を要する。

躁病：躁病は、うつ病と双極の状態、異常な気分の高揚や興奮の持続が特徴である。支離滅裂や妄想、幻覚などの精神異常症状が見られることがある。軽躁は、躁病の軽度な状態で、旅行者に発症することが多い。躁病は、薬物乱用によっても起こるので検査が必要である。

* 精神異常：精神異常は、妄想や幻覚、思考障害あるいは深刻な行動の変化を特徴とする。躁病、うつ病、薬物乱用を含め、様々な思考障害によって起こる。特に慢性的な精神疾患や既往歴のない人に起こる精神異常は、精神科救急の代表である。

急性及び一過性の精神異常：急性及び一過性の精神異常は、急速な症状の出現と短い持続期間を特徴とする。ストレスとの関連が指摘されており、旅行や薬物乱用、暴飲暴食、不眠が原因といわれるが、文化的要因や個人的因子も無視できない。気分障害や薬物乱用、統合失調症、身体的疾患、医薬品などによっても起こるので、正確な診断に基づく対処が必要である。暴力や自殺の危険性があるため十分な注意を要し、入院や専門家への委託が不可能な場合は、継続的な観察が必要である。

統合失調症：統合失調症は、増減する精神障害を特徴とし、十代から成人早期に発症する。慢性の障害であること、比較的若年で発症することから、旅行自体が原因因子とは考えにくい。

* 精神活性物質の使用による障害：旅行は薬物依存の決定因子ではないが、家族や社会から離れ、安い薬物が手に入る環境は、一度回復した人が再発するきっかけとなり得る。

中毒：急性中毒は、アルコールなどの精神活性物質の摂取後に、意識や感覚、思考、情緒、行動、身体機能に混乱を生じる状態である。覚醒剤や大麻などの中毒者は、治療が困難であるため、入院治療が望ましい。

禁断症状：禁断症状は、精神錯乱、自律神経系の活動亢進、鮮明な幻覚、妄想、動揺を特徴とし、死に至ることもある。他の薬の使用により治療や診断が困難になる。中毒や禁断症状のある人には、長期間の治療が必要である。

* 他の関連事項：

迷惑行為：旅客機内の迷惑行為は、乗務員や他の乗客に対する言葉の暴力や、肉体的な暴力、反社会的なふるまいまで多岐に亘る。若い男性が大部分で、アルコール、薬物乱用、口論、混雑、遅延、旅についての知識不足が主な原因である。

カルチャーショックと逆カルチャーショック：旅行者や海外移住者は、新しい文化に適応することに苦痛を感じることもある。これをカルチャーショックという。この反応は、新しい文化に慣れるにつれて軽減する。反対に、長期間海外に滞在していた人が母国に帰った場合、精神的な葛藤を感じることもあり、これを逆カルチャーショックという。時には友人や親類までもが苦痛の原因となるが、自己認識や状況の説明によって症状は改善する。

(武田祥子、小西英二、木戸良明)